

共生・公正・創造



# 東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

## 【シリーズ21】

# 松崎・JR革マル派のガードマンと墮した 初代柴田善憲監査役以下多数の警察出身者

筆者も『もう一つの未完の「国鉄改革」』（月曜評論社）の中で、警察官僚出身・JR東日本初代監査役柴田善憲氏にかかわる松崎氏及びJR革マル派との“危惧すべき関係”について、相当の紙数を費やして警告、問題提起してきたところである。

そして、『日生研レポート』は、先にもJR革マル派の総帥松崎明氏と元警察キャリア柴田善憲氏とのただならぬ癒着関係を指摘、厳しく批判した（【革マルの首領 松崎明 ～逮捕は時間の問題～】<2004年 春季号>）経緯がある。

同レポートの中には、次のような「信じがたいほどの恐ろしい事実」と、柴田善憲氏に対する「厳しい“評価”」が述べられていた。

そもそも革マルの首領「松崎明」氏の擬装転向を「本物の転向だ」と言明し、警察当局やマスコミに積極的に働きかけてきたのは元警視総監だった「秦野章」氏である。

この「秦野章」氏の指示に従って革マルのガードマンとして旗振り役をしてきたのが元警察庁警備局長を務めた「柴田善憲」氏だ。

（JR東日本初代監査役に就任した「柴田善憲」氏は）「松崎の転向は本物」「松崎は安心」「革マルの心配はない」と言い続け、警察庁の首脳部はその報告を鵜呑みにした。そして警察組織に於ける革マル担当部署の解散廃止をしてしまった。

諸悪の根源は「柴田善憲」氏にあると言っても過言では無い。JRに於ける「革マル」問題で犯した柴田氏の責任は大きい。

なお、柴田善憲氏に関しては、この他にも、女性スキャンダルを「革マル・松崎氏」に握られ、ある時期から突然、「松崎氏とJR東労組革マル派のガードマンに成り下がった」という信じがたいような噂が流れている。そして、柴田氏がらみの情報として次のような事柄も囁かれている。

### \* 柴田氏に関する松崎氏とある人物との会話

松崎氏：柴田は俺の言うことはなんでも聞くんだよ。

某氏：それはどうしてですか？

松崎氏：ああ、あいつは警視庁の副総監のとき、女性の剣道チャンピオンに××しか教えていなかったからだよ。

### \* 平成7年9月15日の「マロードイン大宮秘密会議」の情報漏洩問題

革マル支配のJR東労組からの分裂を企図して、当時の菅家東労組委員長（鉄労出身）以下約20名が大宮市内のホテルで決起のための秘密会議を開いた。この秘密情報を入手したある県警がその内容を警察庁に「電報報告」した。ところが、この電報報告書のコピーを入手した柴田氏からすぐにその内容が松崎氏に流れたため、早期の段階で松崎氏はこの秘密会議に参加したJR東労組の関係者を「組織破壊者」として排除することができたと言われている。従って、当時、菅家氏ら旧鉄労グループの分裂・東労組脱退を抑えた第一の功労者は“柴田氏だった”ということになる。

< JR東日本労政『二十年目の検証』163ページから167ページより抜粋 >

# 民主化の声・声・声・・・

2005.11.22 その21

公安警察も重大な関心を寄せている谷川忍著『小説労働組合』なる書物が世に出た。小説ではあるが、東労組本部派と対峙している反本部派の“反撃の書”であることは明白だ。その証拠に、6月の東労組大会で千葉書記長は、『これを積極的に配布して歩いている組合員もいる。権力側の攻撃とまさに同一の歩調を取った動きだ』と総括答弁している（東労組学習討議資料による）。

また、JR東日本ユニオン今井委員長が秋田地本大会で『おそらく福原福太郎と思われる人物から、この本が送られてきた』と挨拶したと勝手にでっち上げ、「明らかにJR東労組破壊を意図した関係プレーであり許すことは出来ない」と妄想している（東労組本部組織部情報 11による）。いずれにしても、東労組が組織破壊本と規定した読んではいけない本がこのたび入手できたので、若干の解説を含めて本紙でシリーズで紹介したい。

## （読んではいけない？）「小説労働組合」の読み方！（1） ～『小説労働組合』のメインテーマ？～



魚は頭から腐ると言う。全ての組織も同じだが、労働組合では尚更である。日本社会は、いつからか、戦争の匂いが漂いはじめた。今こそ労働者のための労働組合が必要なときだ。なのに、労働運動は声も姿もみえない状況にある。なにがそうさせたのか。幹部による労働組合の御用化と私物化策動を、労働者の無関心が許したからだ。このままでは、労働組合は労働者から見捨てられる。そのとき、日本社会は、かつての暗黒の道に入り込むだろう。

『小説労働組合』の表紙の扉部分に著者の執筆意図（問題意識）、言い換えれば、同書のメインテーマと思しき事柄が、次のように記述されている。ここで、「魚」とは著者が所属していた模様の鉄道連合・北本州労組（モデルは「JR総連・東労組」か？）であり、「頭」とは大元（モデルは「松崎明・元JR東労組会長」か？）のことであることは、同書を一読して容易に理解できる。また、著者・谷川忍氏の見解では、「鉄道連合・北本州労組」においては、幹部による労働組合の“御用化”と“私物化”が行われてしまっているということだ。

さて、著者「谷川忍」氏であるが、奥書を見ると、【1937年群馬県に生まれる。高校卒業後、いくつかの職を経て、23歳で国鉄職員となる。職場の青年部役員をふりだしに、40年余を労働運動に生きる。2003年、一切の労働組合役職を辞任する。現在、農業と林業見習い。労働者人生を続行中】とある。JR労働組合運動の関係者間の一致した見解では、「谷川忍」は旧国鉄・動労出身でJR東労組役員を長く務めた福原福太郎氏（元JR総連委員長）のペンネームだとされている。そして、同書の主要な登場人物「鈴木」のモデルとも言われています。つまりこの小説は、東労組本部派・松崎に対する反本部派・福原の頂上対決なのだろうか。内部抗争に明け暮れる東労組に未来はない。

民主化の声・声・声・・・（続く）